日中戦争を多角的に捉える

―対日協力者研究から見える中国社会―

第 10 回・2021 年度受賞 人文科学部門

関　智英
Seki Tomohide
津田塾大学 学芸学部 国際関係学科 教授

《受賞研究》

対日協力者の政治構想
―日中戦争とその前後―

受賞研究

日中戦争と聞いて、「毛沢東」や「蔣介石」といった抗日の英雄の名を思い浮かべた方は、なかなかの中国通と言えるでしょう。しかし、日中戦争は単純に日本と中国との間で戦われた戦争ではありません。より詳細に見れば、当時、東アジアで勢力を誇っていた日本と協調して進んでいくことに将来性を見出す中国人もおり、占領地には日本との協調を目指す政府も樹立されていたのです。

私は、そうした日本に協力した中国人が、いったいどのような展望――将来構想――を掲げていたのかに関心を持ち、研究を続けてきました。その成果をまとめたものが、2020 年に三島海雲学術賞を受賞した『対日協力者の政治構想――日中戦争とその前後』(名古屋大学出版会、2019 年)です。

受賞後の研究

その後は、中国青年党の対日協力や、対日協力者の日中戦争後の動向について研究を深めています。中国青年党は、1930 年代から 40 年代にかけて、国民党・共産党に次ぐ勢力を有した政党です。同党は、党や階級闘争を重視する共産主義に明確に反対すると同時に、独裁体制を敷いた国民党政権に対しても批判的な立場を堅持していました。私は、このように既存の政治体制に批判的であった中国青年党が、反共や反蔣介石という点で日本側と意見が一致したことで、日中戦争前後の時期に、独自の動きを見せていたことを明らかにしました。

一方、中国人対日協力者の戦後の動向については、中国で公開されている史料が乏しいため、手探りの状況にあります。ただ、偶然見つけた山西省の史料からは、かつての協力者たちが、当局の監視対象となりながらも、中華人民共和国の体制下でそれぞれの生活を営んでいた様子を具体的に把握することができました。この成果は、台湾の中央研究院で開催された国際シンポジウムで発表しています。

現在の中国政府が、日中戦争における勝利をもって自らの政権の正統性を担保していることもあり、私の研究テーマは、中国国内では取り組むことが難しい分野でもあります。現在の中国政府の歴史観については、私の監訳したラナ・ミッター著『中国の「よい戦争」――甦る抗日戦争の記憶と新たなナショナリズム』(みすず書房、2022 年)が参考になります。同時に、だからこそ外国人研究者である私が中国を研究する意義があるとも考えています。今後も、ポピュラーな視線とはやや異なる角度から、中国社会を捉えていきたいと思います。

最近のトピックス

2025 年には久しぶりに中国大陸を訪れ、北京・上海に加え、瀋陽・撫順・長春などの東北部、新疆ウイグル自治区のカシュガルやシャヤールまで足を運ぶことができました。電子決済や配車アプリの利便性、インフラ整備の進展には驚かされましたが、その発展が「漢族中心の開発」として進められている印象も受けました。新疆の歴史博物館では、展示が漢族の入植史を主軸に構成されており、中国社会の多様性が失われつつあるのではないか、という危惧も覚えました。杞憂であればよいのですが。

三島海雲記念財団に望むこと

人文社会系の学問をめぐっては、その将来を危ぶむ声がしばしば聞かれます。しかし、たとえ研究分野がマイナーであっても、興味深い視角から研究に取り組む若者は決して少なくありません。今後も、そうした研究者が希望を持って研究を続けられるような支援を、継続していただければと願っています。